

共に在る

在カメルーン日本国大使館

以下は草の根技術協力事業「カメルーン国東部州における小規模農家を対象としたキャッサバ商業化支援事業」に従事されている京都大学アフリカ地域研究資料センターの塩谷暁代さんから伺ったお話です。

友人知人との別れ際、フランス語圏カメルーンでよく交わされる挨拶は、「au revoir /さようなら」ではなく「à bientôt /またね」でもない。彼らは、nous sommes ensemble と言いあう。直訳すると「私たちは共に在る」。このような挨拶、フランスでは聞いたことがない。

民族言語を理解するようになって気づいた。複数の民族言語に「私たちは共に在る」という表現がある。おそらく、まず「私たちは共に在る」という民族言語があって、その表現をフランス語に訳したのではないだろうか。

カメルーン東部で話されるバンベレ語では、ビ・ネ・サンバ、首都ヤウンデ周辺で話されるエトン語、エウオンド語では、ビ・バラと言う。私はこの表現がとても好きだ。正確に言うと、この挨拶を交わす時の人びとの様子が好きだ。温かいものが通いあっているように感じるからだ。

日本語にしてこの挨拶を理解しようとする、少し違和感がある。一人一人が自立していることを前提とした、あるいは、自立していることを求められる社会において、「私たち」という主語はあまり使われないように思う。まして「私たちは共に在る」と言葉にすると、運命共同体のように重々しく感じられて、言われるほうもビックリしてしまうのではないだろうか。

カメルーン東部の村で、村の女性たちが都市から来た商人にキャッサバ加工品を販売している様子を観察していた折、その価格が村の販売価格よりも少し安値であることを不思議に思った。村の顔見知りには高く売り、

都市からきた商人には安く売るのはなぜか？その逆ではないのか？すると、村の女性は言った。「商人たちは、高い交通費を払わなければいけない。大変ではないか。彼らにも養わなければならない家族がいるのに」。商人たちの交通費の負担を思って、安く売なのだという。

首都ヤウンデの市場で、村の女性から農作物を買い取っていた商人が言う。「（村から来た）彼女たちは、農作物を売ったお金で魚や肉を買って、今日中に村に帰らなければいけないのよ。だから現金で支払ってあげなくちゃ」。市場の商人は信用取引を好む傾向にあるが、村の女性を相手とした取引は、現金で決済されることが多い。商人たちは、村の女性の「事情」をよく知っている。だから多少の無理をしてでも（たとえば午前中のうちに商品売って、支払いを済ませようとする努力）、村から来た女性に現金で払おうとする。

市場の徴税人は、商人達から厳しく営業税を取り立てながらも、ある特定の商人からは税を徴収しない。その理由を徴税人は「あの商人はもう老齢だから」とか「つい先日まで大病をしていたから」と説明する。

それぞれが互いの「事情」を思い合うような、人びとの緩やかな連帯を感じる場面は、とても多い。苦しい中でもなんとかやりくりしている者同士、という共感とその根底にあるような気がする。だから「私たちは共に在る」という表現は、カメルーンではしっくりくる。「共に在る」と挨拶を交わしながらも、一人一人が自分の内に今日の一日を立たせる算段をもち、隣人と駆け引きをしている。そんな逞しさと温かさを感じるこの挨拶がたまらなく好きだ。お前も大変だな、俺も大変だけどな、ま、お互い頑張ろう、そう言われている気がするのだ。



カメルーンの工芸品